方向
第一一九号　一九九〇年九月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

春夢女史の文と南子の歌（一）

―「中野逍遥」補遺―

1990 9 7　原田憲雄

一、はじめに

一九七五年に「中野逍遥」を書き『人文論叢』第二十四号に発表した後、他のことに紛れて顧みなかった。今年はじめ、二宮俊博氏の論文に促され、若林芳樹大人の示教により、「中野逍遥『遺稿』中の《春夢子》など」を『方向』第一一一号に、その続きを第一一二号に発表した。大人の雑誌『燔祭』に転載のご意向を得、約三分の二に縮約し「春夢女史」と題し、同誌第三十八号（一九九〇年七月発行）に掲載された。そののち大人がさらに春夢の歌文を、先考若林欽堂の雑誌『壽莪』から見出し教示され、これまた『燔祭』に紙面を与えられたので、「徐福の墓―雑誌『壽莪』に見える春夢女史の作品―」をまとめた。近く出る予定である。

逍遥の文学に対するわたしの批評は、「中野逍遥」でほぼ尽きている。これを第一部とする。あとは逍遥の周辺に関する考証であり、補遺である。そのうちでの「春夢女史」を第二部とし、冗漫な「中野逍遥『遺稿』中の《春夢子》など」と「同・続」を廃止し、「徐福の墓」を第三部とし、本稿を第四部とする。第三部に春夢の歌文のほとんど総てを納めたものの、一部を割愛し、写真を入れず、表記を手直しした。ここには写真と、原文に近い釈文を納め、簡単な説明をしておきたい。

春夢の和歌を考える道筋で参照した『千代田歌集　第三編』に、逍遥が「南子」などと呼んだ南条貞子の和歌五十二首を見出した。既に報告されているかもしれないが、管見に入らないので、備忘として記録しておく。

その他、一部から三部までの、説明の不足や不適切を補うつもりである。

二、春夢女史の文章と和歌

『青莪』は、欽堂・若林利治郎（一八六四―一九四五）が、明治二十八年（一八九五）三月から翌年七月までに十七号を発行した、和歌山県新宮の最初の文学雑誌。その第五、六、七、九号に、春夢の作品が掲載された。ただ「坪井すむ子」「澄子」などと署名し、「春夢女史」ないし「春夢子」の名はもちいない。当時の雑誌の例で変態仮名がまじるが改め、和歌は大人が手写されたものに従う。

山　家　月　　紀伊　坪井すむ子　　第五号（二十八年十月二十日発行）

山里は妻とふ鹿の声さえてあはれぞまさる秋の夜の月

山　家　　澄子　　第六号（二十八年十一月二十三日発行）

軒ちかき松の嵐に世の中のうきこと払う山の下いほ

暮　天　雁

尾花ちる野べの秋風身にしみてかりなき渡る夕暮の空

常盤御前

ときはなる枝にも風の渡れるは花の姿のあればなりけり

◎徐福の墓

坪井澄子

あしてき命をうけ不死の藥を尋ね〳〵て我鄉里熊野の里の露と消ゆるこゝろ秦の徐福がおくつき所いわが門田の中ゝあれた朝な夕な遙かゝ見れどもまだ一度も參でし事なし或夕つゝかた弟と共ゝあせ道の露ふゝわけつゝ問ひぬ二本の樟の木高く立ちならび醜草夥しく生ひ繁れ法が中にたてる石碑苔むして字さへ見ゆわゝかゝそれとならびて標ばかりのもれ五ツ六ツたてりこれ徐福が從者どもなりとの初れはどは地も廣やかゝ訪ふ人も多かりきと聞きしゝ年經るゝ〳〵人の心もうとくなりゆき今ハ漸々せゝめられて僅かなる地を殘されみさるゝても誰の音づるゝ人やあると見るにいつ手向しとも知れぬこゝきび枯れはてゝ見るかげもなし

あはれ徐福よ汝故里をいで多くの苦を忍び遂ゝ其命をもはゝさで外國の土と化しかゝる淋こゝき所ゝいくとせ長く訪ふ人もなく今やそれおくつき所も草にれはれ苔ゝ埋もんとすいかに口惜しくやあらひされど汝が君命殘重んゝしは其事れいかんゝ係はらず其忠心はいとめづべきなりさ法ものから汝が名ハ汝れ國れとか我國ゝまでも永く傳はりぬたとひ汝れおくつき所ハくづされて田とかはり汝が石碑ハ地下に埋めらるゝとも其名はいかで朽ちはつべき千載れ末まで也人々の口にたゝへら法べし番くハ汝魂よ來りてこれを享け心安くいつまでもこゝに眠れかし折から磯馴松の間より白波に洗はれていづ法月かげ一しほをかしう葉末の露ゝ宿りく玉戔列ねたらんが如し折らゝ落ちなんはどゝこれまゝをわが心ばかりれ手向と見よなどうち念ずるゝ心なく吹く風ゝはら〳〵と散るハたが爲めの涙なるらひいとあはれ深し

うちなひく草葉れ風ゝちる露は
それゝたひくる涙ふるらひ

徐福の墓

坪井澄子　第六号（二十八年十一月二十三日発行）

かしこき命をうけ不死の薬を尋ねたづねて我郷里熊野の里の露と消えにし秦の徐福がおくつき所はわが門田のま中にあれば朝な夕な遥かに見れどもまだ一度も参でし事なし或夕つかた弟と共にあぜ道の露ふみわけつつ問ひぬ二本の樟の木高く立ちならび醜草夥しく生ひ繁れるが中にたてる石碑苔むして字さへ見えわかずそれとならびて標ばかりのもの五ツ六ツたてりこは徐福が従者どもなりとか初のほどは地も広やかに訪ふ人も多かりきと聞きしに年経るままに人の心もうとくなりゆき今は漸々せばめられて僅かなる地を残すのみさるにても誰か音づるる人やあると見るにいつ手向しとも知れぬしきび枯れはてて見るかげもなし

あはれ徐福よ汝故里をいで多くの苦を忍び遂に其命をもはたさで外国の土と化しかかる淋しき所にいくとせ永く訪ふ人もなく今やそのおくつき所も草におほはれ苔に埋れんとすいかに口惜しくやあらむされど汝が君命を重んじしは其事のいかんに係はらず其忠心はいとめづべきなりさるものから汝が名は汝の国のみか我国にまでも永く伝はりぬたとひ汝のおくつき所はくづされて田とかはり汝が石碑は地下に埋めらるるとも其名はいかで朽ちはつべき千載の末までも人々の口にたたへらるべし希くは汝魂よ来りてこれを享け心安くいつまでもここに眠れかし折から磯馴松の間より白波に洗はれていづる月かげ一しほをかしう葉末の露に宿りて玉を列ねたらんが如し折らば落ちなんほどにこのままをわが心ばかりの手向と見よなどうち念ずるに心なく吹く風にはらはらと散るはたが為めの涙なるらむといとあはれ深し

うちなひく草葉の風にちる露はたれにたむくる涙なるらむ

古里虫　　澄子　　第七号（二十八年十二月二十八日発行）

古里のやとの垣根はあれはてて虫の音のみぞあるじかほなる

初雪

花かくも雲かゆきかとまがふまでをちの山辺にはつ雪の降る

惜年

きのふまであだにせし日の惜しまれてとしの名残となりにけるかな

◉所感　　すむ子

人生まれて各そのつとめありそを爲さずして人たるのかひなき財産つみたくはへていかゝ楽しく世を送るとも一たび雖にあひて一片れ烟と消え失せなば何のせむやさいのゝ智ありとも之を用ひずば愚人と等しかるべしさきば人各働らさるべからずまして身につけた財もなく魯鈍なるわが身の如きいかでか働のであるべけんやさる歳春は花に秋はもみぢとあくがきあてき夏はあつく冬はさむしとて長き月日歳いたづらに送らばいつの時に何ぞ爲をか爲し得べき見よ大路も氷る冬の日よ破れし衣よ僅かの寒さをしれぎつゝ朝まだきよりあるく人あり腰はあづさの弓の如くこのしらゝは霜をいたゞける老人れ日さくるまで車ひくあてさるを同ト人にしくわれ獨てのく怠るは何ぞやこれ全くひ爲へ心れ足らざるが故なりまことこの心あらんゝは如何ふ法あつさも厭はざ法べし如何なる法寒さも忍ぶべし起よ立よわが心働きても爲しつくせぬ事しげき世にうのと眠て居るはいとつみ深のらずやいで力の限てつとめはげみて人の人たるつとめを御國に盡さゞし

所感

すむ子　第七号（二十八年十二月二十八日発行）

人生まれて各そのつとめありそを為さずば人たるのかひなし財をつみたくはへていかに楽しく世を送るとも一たび難にあひて一片の烟と消え失せなば何かせむまたいかに智ありとも之を用ひずば愚人と等しかるべしされば人各働かざるべからずまして身につける財もなく魯鈍なるわが身の如きいかでか働かであるべけんやさるを春は花に秋はもみぢとあくがれありき夏はあつく冬はさむしとて長き月日をいたづらに送らばいつの時に何ごとをか為し得べき見よ大路も氷る冬の日に破れし衣に僅かの（にカ）寒さをしのぎつつ朝より物うりあるく人あり腰はあづさの弓の如くかしらには霜をいただける老人の日たくるまで車ひくありさるを同じ人にしてわれ独りかく怠るは何ぞやこれ全くひとへ心の足らざるが故なりまことこの心あらんには如何なるあつさも厭はざるべし如何なる寒さも忍ぶべし起よ立よわが心働きても為しつくせぬ事しげき世にうかと眠り居るはいとつみ深からずやいで力の限りつとめはげみて人の人たるつとめを御国に尽さまし

富士山

すむ子　第九号（二十九年三月十五日発行）

世にたかき山はあれどもふじの根のきよき姿にしく山ぞなき
神代よりゆるかぬふじの高根こそけにわが国の姿なりけり

山家梅

山かつが休らふ賤の竹かきにほほ笑みそめし梅の一もと

初若菜

きのふけふわつかにもえし若菜をばはや摘みそめぬ里の乙女子

◎蜘蛛

澄　子

月と村雲花と嵐といへる言葉もうべなるかしそも世は中代と何さを己が思ふさまにならぬもれおやたさの丑爲し得ぬる様になりていとうきしと思ふなとにゆくりなくあしき事のいでくるなどいと口惜しさを月も雲晴るる時あり花も又の春に逢へはれなく美はしう咲くめりさをば萬代とそれ時をう流さで堪ゑ忍ひてまつこそよけれ余りに思ひはやりてもとくなし得らるるものにはあらさりけり己れある夕つれづれ

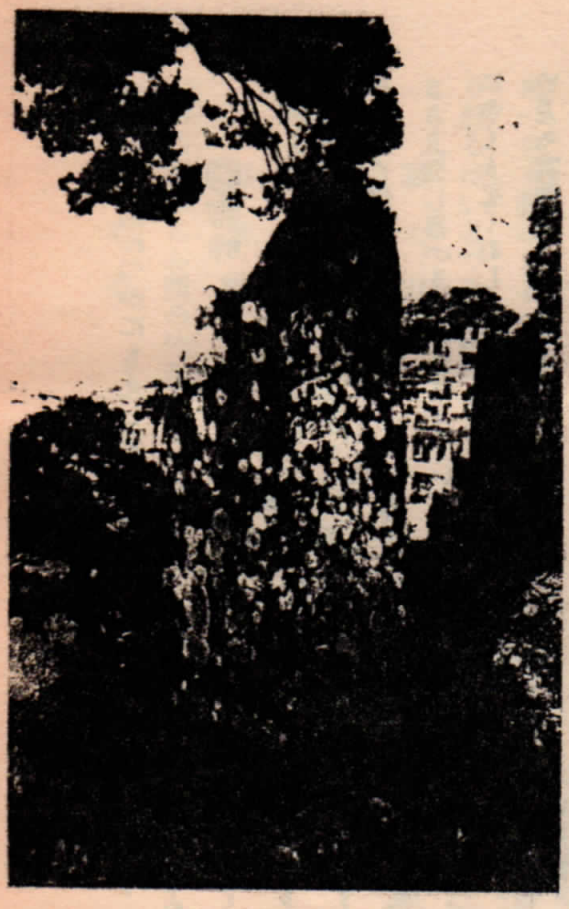
餘り窓より庭を見ひでありじにいと大やうなる蜘蛛の桃の木とり軒に傳ひて巣をのけんとてさやぐゑ試みがはなりしがそのあはひ六七尺もいなれ居ることふれたたやすくのゑらずあさ度糸も絶いてなどし已さへもいや見あきに冷りさるに蜘蛛い倘いく度も同ドことおしつゑ終にめでたう細やかなる巣を遊りかけたりげに忍堪いいみドうかしこきことにこそ殊に已れはいさだ文學びの日も淺くして限りなき文代道たとりつくさんともれもはゐねど心れそさをのこちくは何とな く思ひうさるゑ折〳〵あるはさた堪へ忍ぶの心あさき故なるべし

蜘　蛛　澄子　第九号（二十九年三月十五日発行）

月に村雲花に風といへる言葉もうべなりかしそも世の中のこと何まれ己が思ふままにはならぬものなりたまさかに為し得らるる様になりていとうれしと思ふほとにゆくりなくあしき事のいでくるなどいと口惜しされど月も雲晴るる時あり花も又の春に逢へはおなじく美はしう咲くめりされば万のことその時をうるまで堪え忍ひてまつこそよけれ余りに思ひはやりてもとくなし得らるるものにはあらさりけり己れある夕つれづれの

余り窓より庭を見いでありしにいと大やかなる蜘蛛の桃の木より軒に伝ひて巣をかけんとてさまざまに試みがほなりしがそのあはひ六七尺もはなれ居ることなればたやすくかからずあまた度糸も絶はてなどし己さへもはや見あきにけりさるに蜘蛛は尚いく度も同じことなしつつ終にめでたう細やかなる巣を造りかけたりげに忍堪はいみじうかしこきことにこそ殊に己れはいまだ文学びの日も浅くして限りなき文の道たとりつくさんともおもほへねど心おそさをかこちては何となく思ひうまるる折おりあるはまた堪へ忍ぶの心あさき故なるべし

これらの歌文は、逍遥との交際を回顧し、かれの一周忌をとぶらうため、徐福や蜘蛛にかこつけ、春夢がひそかに書いたものであろう、というのが、わたしの解釈で、理由は「徐福の墓」で述べたから繰り返さない。



坪井家の墓

（若林芳樹氏撮影）

坪井蜂音庵居士

碧松院梅顔智香大姉

歌人・大塚五朗（一〇）

1990 9 11　原田憲雄

対笠荘

一九二九年（つづき）　五郎、三十二歳。京都府立京都第三中学校教諭。

友立野信義の家を宿にしながら家捜しをする五郎を、加勢を口実に、竜安寺や御室の仁和寺に案内した同僚のYというのは山村湖四郎である。『京三中同窓会名簿』（一九六七年発行）によれば、一九二三年四月から一九四二年三月まで在職し、現職として「東邦大付属東邦高（駒場）教授」と記す。その間に、一九四二年から京都府立嵯峨野高等女学校教諭として、引き続き五郎の同僚だった時期があるはずである。わたしは山村先生の授業を受けることは一度もなく、大塚先生のお宅で出会うこともなかった。三中の校友会誌に短歌を発表し、若山喜志子女史の『創作』に入っておられるように聞いたが、それ以外の知識はほとんどない。

五郎はやがて太秦安井小山に家を見つけ、五月には家族を呼び京都での家庭生活を始める。小山は山陰線花園駅の東側だが、「ごたごたした感じで」松子には気に入らない。南の畑の中にぽつぽつ住宅が建ちはじめ、高等蚕業学校の教員や三中の同僚が入居していたので、その一軒に移転した。この家のことを「太秦ほとり」にいう。

おのれまづ寂しくなりぬ都べも秋たちけりとたよりかきつつ

都べといったところで、ここ太秦界隈は、殆ど田舎めいた都の片ほとりで、北向の二階から山陰線の列車が、畠の中の柿の樹がくりに見かけられるなどは、一寸静かなみはらしである。

夏は虫の多いのも困るが、かう静かな秋の陽が、比叡や愛宕の山肌をクリーム色に染める頃となつてみると、虫の多かったことなども却つて嬉しい話柄になるといふものである。

前の畠も夏から幾度野菜の種類をかへたかしれない。一面の南瓜畑で、夕闇に黄色い花風を漂はせた頃から、大根の青い葉が燃えるやうな光沢を空に噴きあげる此頃まで、耕作、播種、収穫と一人の若い百姓が、朝から夕方まで働いてゐた。……

その前畠を越して、山陰線のレールを越して妙心寺の高い甍と、そのまたむかふに形（なり）のいい裾をひらいた衣笠山が眉に迫っている。その裾の東にのびたあたりが金閣寺で、五月の頃ともなれば椎の若葉が美しい。いつであつたか、丁度私の親しい友達が遊びに来た時、ふと冗談のやうに、

「どうだ、この家はいいだらう。対笠荘とは素的だろう。」

といつたことから、いつの間にやら私の友達仲間はこの家を対笠荘にしてしまつたのである。磨硝子のやうな日輪が、その衣笠山の山肌に雲の影を落して行くこの頃ともなれば対笠荘という名も一層ぴつたりしてくるやうな気がする。私の対笠荘に遊びに来た人は、一度は北の窓からのみはらしを羨ましがるのであるが、もう一年以上も住みついた私にさえ、時にしばらくは窓辺を離れさせないことすらある。（風土 一〇九―一一）

この家は家族のみなが気に入った、というので、松子夫人に町名を聞いたが、覚えておられない。妙心寺の屋根越しに衣笠山が見えるのならと、地図で捜すと、双ヶ岡の南の和泉式部町、森ヶ東町、蚕の社のある森ヶ前町があたりそうだが、そんな名だったようでもない「小針先生がいらっしゃいましたよ」とのことで、また名簿を

繰る。数学の小針徳治先生もなくなってはおられたが住所は「右京区太秦安井裏町一」とある。地図にかえる。安井には、北御所町をはさみ東裏町と西裏町があり、天神川の南に二条裏町がある。さきの記事に照らせば西裏町がちかそうだが、そこから衣笠山を見通さぬことには判断しにくい。行ってみることにした。

戦前は西大路までしかなかった丸太町通が、西に嵯峨までのび、花園駅周辺はずいぶん整備されたのだが、小山町はやっぱりごたごたした感じである。自転車を南に向けて走ったら馬塚町のバス停留所に出る。家の表札を見て歩くと、奥畑町から辻ノ内町を通り過ぎつつある。北に取って返し、北御所町に入ったものの、どちらも建て込んで見晴らせない。東裏町も同様である。西にむかって西裏町らしいあたりにゆくと、そこは花園大学太秦学舎とイマジカという会社だけで、地名をかいた表札など掲げておらず、何町かわからぬ。どちらも建ってまもないたたずまいである。衣笠山はおろか妙心寺も見えない。学舎の東側をぐるっと南にまわる。東洋現像所という会社の、「痴漢に注意」という張紙をべたべた貼ったコンクリート塀の間のほそい路に入り込んでしまう。まあいいや、と進んだら、三角形のせまい墓地にでた。ばらばらと二十基ほどの墓石が散らばってはいるが、花を供えたものは一つもなく、墓地全体が見捨てられた感じである。三角の底辺にあたるところを川が走っているが、橋はなく、有刺鉄線が張られ、そこで路は行き詰まっていた。京都にもこんなところが残っていたのかと、『法華経』譬喩品の「三界は安きことなし」の偈をとなえて、墓地をはなれた。御室川に合流するはずのその川ぞいの道に出て北を見ると、なんと、衣笠山が目の前にせまり、手前に妙心寺の甍がみえる。ここにちがいない。そう思ったが、近すぎる感じもする。さらに南に向かい京映撮影所の看板の立つだだっぴろいガレージを過ぎて、

礼子内親王の墓というこんもりした木立まで、振り返り振り返りしてみたが、感じはさほど変らなかった。

帰ってから調べてみると、安井という地名は後白河の皇女で安徳・後鳥羽の准母であった亮子内親王の安井御所址だそうで、一九三一年に右京区に編入される前は、葛野郡太秦村に属している。そういえば私の知る戦前のこのあたりはまったくの田と畑ばかりで、山陰線の南側に住宅があることに気づかなかった。あれこれ捜していると、ひょっくり、一九三二年の陸地測量部の五万分の一の地図が出てきた。中学生のわたしが使ったものだ。現像所らしい建物はすでに記され、その西の、花園駅から南下する道ぞいに住宅があるほかは田畑で、地名も安井しか見えない。五万分の一はこまかな地名は出さぬのが例だが、今の地名は、戦後もかなりたって住宅が建て込むにつれ設けられたに違いなく、村だった当時の畑の中にぽつぽつ開けた住宅地帯は、ただの安井の一郭だったのであろう。そうして先生の旧宅は、今のイマジカか花園大学太秦学舎が建つあたりで消滅したのだろう。わたしは詮索をうちきった。

六月十九日、次男の樹（しげる）が生まれる。

八月三十一日、森永義一が、英語の教諭として着任した。すでに名のでた山村湖四郎、山村とともに一九二三年から勤める国語の岩見護、この三人が、五郎にとってのもっとも親しい同僚であり、終生の友人となった。

森永先生も、岩見先生も、わたしの受業の師ではない。岩見先生は図書室の係をしておられ、「私の読書」という企画に、なぜだかわたしを指名された。森永先生は、大塚先生の葬後、お話を伺っただけである。

たぶんこの年、のちに弟子となる森田曠平が、三中に入学した。

深　泥　池　（みぞろがいけ）　1990 9 12　原　田　慶

「深泥池へ行かはったことはありますか」

とたずねると、若い美容師さんは、どの人も、

「いいえ、みどろがいけて聞くと何かこわい、気持ちわるいし、行ったことありません」

といった。ふつう「みどろがいけ」という人が多いのである。

「なんでですか。何かこわいような話でもあるのですか」

「お化けが出るとか、幽霊が出るとか聞きますけど」

となりの席の人が、

「そうそう、トンネルのとこに幽霊が出るとか」

ということである。トンネルのあるのは、深泥池の東側の山を越えた宝ケ池である。トンネルに幽霊が出るという現代版こわい話は、交通事故や殺人事件などと結びつけられて、週刊誌を賑わしているようだけれど、いまの深泥池にそのような雰囲気はない。

深泥池は、京都盆地の北のはずれ、三方を山に囲まれた所にある。上賀茂神社から東へ一・五キロメートル、ゆっくり歩いても約二十五分。植物園から北へ道を取るならもうすこし近い距離にある。

八月十九日、晴れて暑い日だった。「みぞろが池自然観察会」の仲間に入れてもらうために、わたしは上賀茂

へでかけた。近くからは深泥池へ行くバスの回数が少ないので、上賀茂神社までのバスに乗り、そこから歩くことにした。途中、大田神社へ寄って、カキツバタの沢の様子をのぞいてみた。沢の中には、細長い島があり、木が茂っている。ほかに、「蛇の枕」「蛇の寝床」といわれる石があるそうだけれど、カキツバタの葉に埋もれて見えなかった。　古くから、稲作には多くの湿地を利用したので、その地の神を祀り、神霊を慰める行事が営まれた。これが田の神祭りの初めであり、奉納された田舞や田楽が、後の芸能のもとにもなっているということであるが、大田神社には、古風な田楽の笛の譜が残っているそうである。むかし、五節の田楽の舞姫を志望する貴族の娘が、この神社に祈願をこめたことがあったとも伝えられ、現在でも例月十日の夜に、里神楽が奉納されているらしい。

祭神は天鈿女命、猿田彦神、船玉神の三柱に末社と福徳神を祀っている。猿田彦神と天鈿女命は夫婦神とされているが、大国主命が「豊葦原の国」へ降りてこられた時に、迎えて案内したのが猿田彦神、その恐ろしげな大男を見て、まず交渉にあたったのが天鈿女命であるという。いずれにしても沼沢地を耕作するにあたって、地鎮祭のように祀ったものらしい。ふるくは大田を恩田とも書き、スゲなどの稲に似た植物の生えた沼沢地を鬼の田んぼと言うように、恩田も鬼田だと考える人もある。だから、目が鋭く、鼻が長く、顔の赤い大男とされる猿田彦神は、天狗であり、天狗は鬼だから、大田神社の神霊は猿田彦神で、天鈿女命は神社の巫女なのだろうという。

大田神社を過ぎて、東へ歩いて行くと、しばらくは道の両側に、大きな農家が続いている。左手が北で、山に近いので土地が高く、右は低い。歩くにつれて、新しい家が交じるようになり、道が南へ伸びている辻に出た。

低い側に広い児童公園があり、まだ家は続くのだけれど、村はずれという感じがする。公園の反対側、高いほうに、古いお堂のような平屋があり、子どもや大人が集まっていた。気をつけて見ると「やすらい堂」と書いてあり、地蔵盆をしているのだった。公園のほうにもテントを張って、「延命地蔵尊」と書いた提灯が吊してある。「安らい堂」を初めて見たが、「やすらい祭り」の鬼はここから出るのである。花傘に疫癘を集め、鬼が踊りながら町のなかを被って行く「やすらい堂」はこの村外れにあったのである。ここを過ぎると、青々と稲の育つ水田の中に赤や白の自動車が並んでいたり、畑の中に大きなアパートが建っていたり、農地が住宅に変わりつつある風景が目だってきた。赤い屋根に白い壁の西洋風の大きな建物のすぐ下にビニールハウスの並んだ畑が続く。ビニールのトンネルの中は何も植わっていなくて、まっ赤に枯れた葉が土に貼り付いている。この畑では、夏には栽培していないのだろうか。

神山の大田の沢のかきつばたふかきたのみは色にみゆらむ

藤原俊成

神山は上賀茂神社の神体の山で、深泥池の辺りまで一帯は沼沢地で、カキツバタも現在のように狭い池でなくもっと広く咲いていただろうと言われる。その湿地を利用して農業を続けてきたわけだが、深泥池を溜め池として堤防を築き、農業用水に利用するようになったのは一五〇〇年くらい前だと推定されるそうで、平成六年が平安建都一二〇〇年になるというから、深泥池が用水として使われたのはさらに遡る。この辺りを開墾して栄えたのが加茂氏である。大田神社は、今では上賀茂神社の摂社になっているが、付近で最も古く、加茂氏の崇敬を受けた神社であるという。つまり加茂氏よりこの神社のほうが古いということになる。大田神社の鳥居の外に椋の

古木を神体として福徳神が祀られているが、これが大陸で祀られる山神ならば、大田神社は、古くからこの辺りに住みついて耕作していた渡来系の部族が祀った神社が基礎にあったのではないかとも考えている人がある。このように上賀茂一帯は、湿地を利用して、古くから稲作が行われてきた土地なのである。

あちこち眺めたり立ち止まったりして、三十分余りかかって深泥池に着いた。「北区上賀茂深泥が池町」という標識が立っている。

深泥池は、昔から、泥濘池、美与呂池、美度呂池、洫呂池、御曽呂池、美曽呂池、御菩薩池、源菩薩池などと記す。言伝えによれば、僧行基がこの地で修法したときに、弥勒菩薩が池の上に出現されたので、御菩薩池と書いて、「みぞろがいけ」と呼んだが、底に泥がたくさん積もっている池と考えられ、「深泥池」という表記が流布したらしい。昔は、この辺りは寂しい所であったから、大蛇や竜が住むという伝説、鬼が住んでいたとか、盗賊がかくれていたといった話があるが、ずっと昔に村が全焼する大火があり、古い記録はほとんど残っていないのだという。

この地の人々は地蔵信仰に厚く、今も古い地蔵堂があり、京都六地蔵巡りの第一番になっていた。そのお堂の地蔵尊は現在、鞍馬口にある上善寺に移されて、八月二十二日、二十三日の地蔵巡りには、たくさんの参詣客を集めているようである。地蔵堂に近い小高い山の中腹に、貴船明神を祀る鎮守の社があって、そこから幡枝（はたえだ）へ越える坂を眺めることができる。この辺り、鞍馬街道に沿って、古い藁葺きの家なども交じるところが昔の深泥池村である。昭和七年の地図で見るとこの街道沿いの村のほかは植物園まで、すっかり水田になって

いる。四十年には三〇〇戸ほどの村になったが、どんどん人が増え、六十年には八つの町を数え八〇〇戸になったということである。六十二年の地図を見ると、以前は一面に水田であった所に、碁盤の目のように道路がつき、全域に建物がはめこまれ、その隙間を埋めるように田畑が残っている。水田地帯がニュータウンに変わりつつあるらしい。

冬には、深泥池には、たくさんの渡り鳥が飛んでくる。鴨やカイツブリが所狭しと泳いでいる。昔から鳥が多かったらしくて、淳和天皇が天長六年(八二九)ここで遊猟されたといい、今昔物語にも、貧しい男が妻に鳥を食べさせたいと、ここで鴨を射る話があるそうである。わたしはその話を見つけることができなかった。また、和泉式部が貴船神社に詣でたことはよく知られているが、

名を聞けば影だに見えじみどろ池に住む水鳥のあるぞ怪しき

と詠んでいる。式部が貴船まで行ったのが長元五年(一〇三二)頃という説があるからこの歌も、淳和天皇より二〇〇年ほど後の世ということになる。その長い歳月も、自然をそんなに変えていなかったのだろうという気がする。

現在、深泥池の西側を通り、北へ山を越えて、岩倉方面へ行く道がついている。舗装された市道で、自動車が走っている。今年の市議会でこの市道の幅を広げようということが取り上げられた。昭和三十五年に、この道路を一四メートルの巾に広げてよいという許可が出ているのだという。どういうことなのだろうか。池は個人の物だが、道巾を広げるためには、池を埋めるよりほかにないのである。

六月九日に「深泥池を守る会」結成総会とシンポジュウム、というのが開かれたので、聞きに行ってみた。わ

たしは、深泥池の自然については、自分の目で見たこと以外に何も知らなかった。この日は「深泥池を美しくする会」「みぞろがいけ自然観察会」のそれぞれの代表と、生物の専門家四人が、スライドを使ったりして、深泥池について植物や、虫、魚、鳥、浮島など、わかりやすく説明された。他に弁護士と、道路の拡張を要望している岩倉の人達の代表も話された。ここで、わたしは初めて、深泥池の自然を知ることができた。

「深泥池を守る会」ではこの池を「みぞろがいけ」と呼んでいる。それはこの池が、泥の深い池のように考えられているのが誤りだからではないだろうか。土地の人はずっとそう呼んできているのである。池は、一見沼地のようで、さまざまな水草が育っている。岸のほうの浅い所には、ヨシ、マコモ、ガマ、カキツバタ、水面にはヒシ、ジュンサイなどが浮き、島には低い部分にミツガシワ、アゼスゲ、カキツバタ、サワギキョウ、ハリミズゴケ、タヌキモ、ホロムイソウというのもあって、これは世界最南端の植物だそうである。島の盛り上がった所には、アカマツ、イヌツゲ、ノリウツギ、ホツツジ、ネジキ、ウメモドキなどが生えている。ところが、この泥沼のような、島のような所は、浮島なのだという。

浮島の調査のために、潜水家が、アクアラングを付けて、二度ほど、浮島の底に挑戦しました。池の底はドロです。潜水して進むと池のドロが舞いあがり、前方が見えなくなります。上に上がろうとしても、浮島のため水面に出ることが出来ません。浮島の奥に入れば、出口がわからなくなりますこのようなことで奥まで調査することは出来ませんでした。しかし、浮島は浮いていました。

「深泥池」（一九八五年八月・深泥池を美しくする会発行）

この浮島は、植物が枯れてその遺体が堆積し、泥炭になったもので、その厚さは一〇メートルはあるという。現在、最も底にある物が、六万年くらい昔のものであることが調査されているという。また、ボーリングをして調べたところ、池の南側に堤防が築かれ、溜池として利用され始めたのは一五〇〇年前ごろと考えられ、現在見られる浮島は堤ができて水面が高くなり植物遺体の層が浮かび上がってできたとも考えられるが、はっきりした原因はいまだに謎につつまれている、と観察会発行の「深泥池の自然」誌に書かれている。またこの浮島は冬と夏とで三〇センチほどの上下浮沈運動をしているが、原因は、積み重なった植物遺体から発するメタンガスだという。夏には三〇センチほど浮き上がり、水上に黒っぽい土の色をした浮島の外縁が見える。その辺りには、暖地にはめずらしい氷期から生き残ってきたと考えられるミツガシワが、四月から五月ごろに白い花を咲かせる。気温が低くなって、ガスの発生が弱くなるとこの部分は水の中に沈むわけである。

この浮島のようなのを高層湿原といい、温帯の山岳地帯で、夏に気温が低く、多湿な土地にできることが多く、青森県の岩木山、信越国境の苗場山（なえばさん）、福島・山形・新潟三県にまたがる飯豊山（いいでさん）、長野県の霧ヶ峰など、多く中部地方以北にあるが、異例として、九州の蘭牟田（いむた）池、坊がつるなどがあるそうである。これらはみな山の上にあり、山の神、天狗、餓鬼、精霊などの作った田んぼとして稲の農耕儀礼の祭場となっているところが多いという。深泥池にそのような儀礼が伝わっていないのは、この池が低地にあり、古くから溜め池として稲作に使われてきたからかもしれない。

六月の説明会で意外に思ったことは、深泥池が、個人の所有だということだった。池の北側を埋め立てて大き

な病院が建っているが、池はこの病院設立者の所有であり、その人は「深泥池を美しくする会」のメンバーでもある。戦後の食糧不足のときには、この池の水を抜いて米作りをしてはという意見も出たが、個人の所有であったためかえってその難を免れたということである。

池の北側に加えて、西が舗装道路となったため、山の水が池に浸みでることがなくなり、現在、東の山からの水だけで池が保たれている。池らしく水があるのは東から南にかけてで、北と西は沼のように、ひたひたの水にアシ、マコモ、ガマなどが一面に茂っている。冬には、池は枯れ色の寂しい景色になり、和泉式部や源頼光などという人達が貴船に参ったころのすさまじい鞍馬街道が想像されるような気配である。

浮島が長いあいだ保たれてきたのは、周囲の山が約二億年前の古生代に海の底に堆積した放散虫や泥が固まって出来たチャートや頁岩などの硬い岩盤でできているために、雨水が深く浸み込まず地表を流れて池に注ぎ込むからだという。水に肥料分が少く、藻類の繁殖で水が酸性になり堆積物を腐らせないという条件で浮島が保たれ、ミツガシワやホロムイソウ、それにともなう虫や魚など氷期のままの自然が残ってきたのである。だから、今、これ以上、山から流れ込む水を止めたり、空気を汚染して、水をよごすと、浮島を保つことができなくなり、氷期から残ってきた自然は死んでしまうわけである。

八月の観察会には、高校生や中学生の参加が多く、熱心に質問している人もあった。池の水面はヒシでおおわれ、白い小さな花をつけていた。水上に黄色い花を咲かせているタヌキモは、食虫植物だという。ヒメコウホネの黄色い花が浮島の縁に咲いている。ナガバオモダカなどの外来植物に追われて衰えていたジュンサイが、人の

手で外来植物物を除くことによって、復活してきたということだった。魚は、フナ、コイ、モツゴ、バラタナゴ、モロコ、ドブガイ、ヌマエビなどがいるそうであるが、ブラックバスが誰かに入れられて、小魚や、カイツブリのひなを襲ったりするらしい。

この日は全員でセミの抜け殻を採集して、空気の汚れを知る目安にした。ニイニイゼミ三九、ツクツクホウシ四、アブラゼミ五七だった。ニイニイゼミは空気のきれいなところにいるので、山の反対側の、宝ケ池のほうでは見られなくなったそうである。宝ケ池も、国際会館ができて公園になるまでは、水田と山ばかりの静かな処であった。深泥池の西側を通る道路は、現在、狭くて、バスが行き違うことができず、池の南西の角に、バス会社から派遣された人がいつもいて、旗を振って交通整理をし、バスを通過させている。この道を広げたら、自動車の交通量が増えるのは当然で、空気を汚し、水を汚す。反対するだけでは解決しないけれど、本当に必要なことが何であるかをよく考えてみなければならない。壊してしまった自然は二度と取り返すことはできないのだから。

観察会に参加して、はじめて一・八キロの池の周囲をすっかり歩くことができた。見る方角によって深泥池は表情を変える。南側に居て池の面を見ていると、平凡な池である。少し東へまわると、深々と豊かな湖の感じがする。東の角近くまで行くと、水に触れることができて親しみを感じる。北に向かって進むと、マコモやアシがびっしり茂って前が何も見えない。病院のほうへ行くと、池の中は、すぐ近くに木や草が茂っている。日曜日の病院は静かで、見舞い客の車が数台並んでいた。観察会の人達は、東の角からもと来たほうへ引き返していったので、わたしは一人で病院の庭を急ぎ足で通り抜けた。池の南から東にいる間は、池は池らしい姿をしているが、

北へ回ると途方もなく茫漠とした風景だった。

深泥池は昭和二年に天然記念物に指定されている。病院の排水は以前は池に流れ込んでいたが、今では流れ込まないように処理されているようである。これほどの自然を個人の力で守ることはできない。東の山は、ことし京都市が買収したというが、「守る会」の人達は、池と付近の山全体を公的な土地として、深泥池を守るべきであると言っている。

京都に住んでいても「深泥池はこわい」と近づかない人もある。そんな人でも行ってみたら「なんやこの池、なんにもこわいことあらへんやんか」と思うかもしれない。

流れ込む水をさえぎり、池を削り取って陽に晒し、この貴重な自然環境を衰弱させたのはわたしたち人間である。こわいと思っていないで、もっと知らなければならない。

「次の観察会は九月十六日ですよ」

とわたしが言うと、パーマ屋さんの若い美容師さんが、

「わたし行きたい」

と言った。元気のいい人である。行って知ったほうがいい。でも日曜日だから、美容師さんにとっては特別に忙しい日にちがいない。

※前号正誤　一五頁一一行　特別な所でければ→特別な所でなければ　二二頁一行　通りの→人通りの

三界は安きことなし　—法華経巡礼　51—　1990 9 13　原田憲雄

3-31. 三界はまたあの家のように、恐ろしく、幾百もの苦しみに満ち、

四方あますところなく燃え上がる、幾百というあまたの生老病死によって。（86）

わたしは三界を離れ静かであり、ただひとり林の中に住んでいる。

この三界はわたしのもので、そこで焼かれているものこそわたしの息子だ。（87）

わたしはそこでの苦しみを説く、わたしこそかれらの保護者であることを知っているので。

しかしかれらは愚かにもたれもわたしのことばを聞かぬ、こころが愛欲に捉われていて。（88）

traidhātukaṃ ca (W:co) yatha tan niveśanaṃ subhairavaṃ duḥkha-śatābhikīrṇam /

aśeṣataḥ prajvalitaṃ smantāj jātī-jarā-vyādhi-śatair anekaiḥ //86//

ahaṃ ca traidhātuka-mukta śānto ekānta-sthāyī pavane vasāmi /

traidhātukaṃ ca (W:co) mam idaṃ parigraho ye hy atra dahyanti mamaiti putrāḥ //87//

ahaṃ ca ādīnava tatra darśayī viditva trāṇaṃ aham eva caiṣām/

na caiva me te śruṇi,sarvi bālā yathā 'pi kāmeṣu vilagna-buddhayaḥ //88//

ここのところを妙本は次のように訳す。下はその、伝統的な読み下しである。

三界無安　猶如火宅　　三界は安きことなし、　なお火宅のごとし。

衆苦充満　甚可怖畏	衆苦　充満して、	はなはだ怖畏すべし。
常有生老　病死憂患	つねに　生老	病死の憂患（うげん）あり。
如是等火　熾然不息	かくのごときらの火、	熾然（しねん）としてやまず。
如来已離　三界火宅	如来はすでに	三界の火宅を離れ、
寂然閑居　安処林野	寂然（じゃくねん）として閑居（げんこ）し、林野に安処せり。	
今此三界　皆是我有	いまこの三界は	みなこれ我が有（う）なり。
其中衆生　悉是吾子	そのなかの衆生は	ことごとくこれわが子なり。
而今此処　多諸患難	しかもいまこの処は	もろもろの患難（げんなん）多し。
唯我一人　能為救護	ただわれ一人のみ	よく救護（くご）をなす。
雖復教詔　而不信受	また教詔すといへども、しかも信受せず。	
於諸欲染　貪著深故	もろもろの欲染（よくぜん）において　貪著（どんぢゃく）深きが故なり。	

この二十四句のうち末の四句をのぞいた二十句を、本稿（27）に引いた「欲令衆」とともに、わたしたちは日々讃誦する。讃誦するからといっ　ついているわけでもなく、かえって口に馴れて心に思わぬおろそかさに陥りがちだが、「三界は安きことなし」という言葉は、おのれの内なる三界の荒廃を指し示すものとして、日増しに痛切に感ぜられる。「また教詔すといえども、しかも信受せず」の句をとなえないのは、あるいは「もろもろの欲染において貪著深い」おのれがあまりにもまざまざと写されているためだろうか。